

令和3年6月25日

学位（博士・言語教育学）申請論文 審査報告書

〈学位申請者〉 氏名 池田 純 学生番号 G7D5012017

〈論文題名〉 反義併存的な語に関する研究

〈審査委員〉

主査 外国語学部教授 阿久津 智

副査 外国語学部教授 遠藤 裕子

副査 慶應義塾大学教授 木村 義之

## I. 論文の主旨

本論文は、今日の日本語使用において、問題にされることの多い、「結構」「大丈夫」「適当」「微妙」「やばい」の 5 つの「反義併存的な語」（一語の中にプラス評価の意味とマイナス評価の意味が同時に存在する語）について、先行研究・各種辞書類・実例資料等を基に、総合的考察を行い、各語がどのような意味・用法の変遷をたどり、反義併存的な性格をもつに至ったのかを探り、「反義併存的な語」のもつ特徴や傾向を明らかにしようとした研究である。

研究方法は、古典籍から現代までの、各種文献資料の調査・分析、および、当該語に関する先行研究を踏まえての考察を主としている。調査対象の文献資料には、近代～現代のものを中心に、各種辞書類、コーパス類、新聞データベース、書籍、ネット記事などが含まれ、共時的・通時的な観点から、総合的な分析・考察を行っている。

本研究では、主に、次のようなことを明らかにしている。

「結構」の語誌。多義語化し、反義併存性（返答時における“OK”あるいは“NO”（婉曲な断り））をもつに至った経緯や、近年の用法など。

「大丈夫」の語誌。多義語化し、反義併存性（返答時における“OK”あるいは“NO”（婉曲な断り））をもつに至った経緯や、近年の用法など。

「適当」の語誌。多義語化し、反義併存性（プラス評価性あるいはマイナス評価性）をもつに至った経緯や、近年の用法など。

「微妙」の語誌。多義語化し、反義併存性（プラス評価性あるいはマイナス評価性）をもつに至った経緯や、近年の用法など。

「やばい」の語誌。多義語化し、反義併存性（マイナス評価性あるいはプラス評価性）をもつに至った経緯や、近年の用法など。

## II. 論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

### 第1章 序論

- 1.1 本論文の構成
- 1.2 背景および目的
- 1.3 凡例・その他

### 第2章 総論

- 2.1 意味の変化
- 2.2 類義
- 2.3 反義

- 2.4 多義
- 2.5 あいまい性
- 2.6 反義併存
- 2.7 表記の多様性

### **第3章 結構**

- 3.1 概論
- 3.2 先行研究および資料
- 3.3 近代の辞書における「結構」
- 3.4 現代の国語辞書における「結構」
- 3.5 類語辞書における「結構」
- 3.6 「結構」の語義関連表
- 3.7 「結構」の実例

### **第4章 大丈夫**

- 4.1 概論
- 4.2 先行研究および資料
- 4.3 近代の辞書における「大丈夫」
- 4.4 現代の国語辞書における「大丈夫」
- 4.5 類語辞書における「大丈夫」
- 4.6 「大丈夫」の語義関連表
- 4.7 「大丈夫」の実例

### **第5章 適當**

- 5.1 概論
- 5.2 先行研究および資料
- 5.3 近代の辞書における「適當」
- 5.4 現代の国語辞書における「適當」
- 5.5 類語辞書における「適當」
- 5.6 「適當」の語義関連表
- 5.7 「適當」の実例

### **第6章 微妙**

- 6.1 概論
- 6.2 先行研究および資料
- 6.3 近代の辞書における「微妙」

- 6.4 現代の国語辞書における「結構」
- 6.5 『現代用語の基礎知識』過去約 30 年分における「ビミョー」の変遷
- 6.6 類語辞書における「微妙」
- 6.7 「微妙」の語義関連表
- 6.8 「ヨミダス歴史館」における「微妙」の年代別検索結果（平成期）
- 6.9 「微妙」の実例

## 第7章 やばい

- 7.1 概論
- 7.2 先行研究および資料
- 7.3 近現代の特殊用途辞書等における「やばい」
- 7.4 近現代の一般辞書における「やばい」
- 7.5 『現代用語の基礎知識』過去約 50 年分における「やばい」の変遷
- 7.6 類語辞書における「やばい」
- 7.7 「やばい」の語義関連表
- 7.8 「ヨミダス歴史館」における「やばい」の年代別検索結果（平成期）
- 7.9 「やばい」の実例

## 第8章 結論と課題

- 8.1 まとめと結論
- 8.2 今後の課題

## 参考文献・資料

### その他参考資料

## Ⅲ. 本論文の概要

### 第1章 序論

第1章では、論文の構成（章立て）、研究の背景や目的、各論で扱う語の選定等について述べている。

日本語には「反義併存的な性質を持つ語」が比較的多いことに気づき、それを動機として、「結構」「大丈夫」「適当」「微妙」「やばい」を選定し、これらの語が「どのような意味の変遷をもって反義併存的な性質を持つに至ったのか」について解明していくことを、本研究の目的とすると述べている。

### 第2章 総論

第2章は、第3章～第7章の各論に対する「総論」となっている。ここでは、各論に先立ち、「反義併存」(ambivalence)に関わる重要な意味論的概念(「意味の変化」「類義」「反義」「多義」「あいまい性」「反義併存」など)を取り上げ、先行研究を基に、後の章で取り上げる具体例や考察結果などを先取りしながら論じ、合わせて、「反義併存的な語」のもつ特徴や傾向をまとめている。

### 第3章 結構

第3章では、「結構」について、分析・考察している。

「結構」は、もともと「ものごとの仕組み、組み立て」を表す漢語であったが、日本語において多義性を獲得し、品詞も、名詞から動詞、形容動詞、さらに、副詞へと拡大してきた。近世には、程度の高いほめ言葉として使われるようになったが、近代には、十分であることから発展したとみられる婉曲に断る場合の用法が生まれた。現代語においては、副詞用法でよく使われるが、これは明治期にはあまり見られなかった。近年では、意味らしい意味のない「語調調整的」な用法も見られるようになっている。

以上のようなことを語誌的に明らかにしている。

### 第4章 大丈夫

第4章では、「大丈夫」について、分析・考察している。

「大丈夫」は、もともと「立派な男子」を表す漢語であったが、日本語において独自に転義が進み、品詞も、名詞から形容動詞に変わり、さらに、副詞の用法も生まれた。近世に、「問題がなく安心なさま」を表すようになったが、近年では、「結構」に似た、相手からの勧誘・提案に対して、気遣いを示して、婉曲に断る返答表現として多く使われるようになっている。

以上のようなことを語誌的に明らかにしている。

### 第5章 適当

第5章では、「適当」について、分析・考察している。

「適当」は、本来「ぴったり合う・あてはまる」を表す漢語であったが、日本語において独自に転義が進み、品詞も、動詞から形容動詞に変わっている。近代以降(現代)に、「ぴったり→ほどほど→だいたい・いい加減」のように発展してきた。このほかに、「三つの中から適当に選んでください」のような「随意に、任意に」といった意味で使われる用法もある。近世～近代(明治・大正)には「的当」の表記も見られる。

以上のようなことを語誌的に明らかにしている。

### 第6章 微妙

第6章では、「微妙」について、分析・考察している。

「微妙」は、もともと「極めてすぐれているさま」を表し、非常に程度の高い称賛に使われる仏教系漢語であった。近代になってからも深淵な語感があり、文語的要素が強かったが、「どちらともはっきり言い切れないようす」も表すようになった。近年（2000年代初頭あたりから）、否定的な気分を婉曲に表す用法が生まれ、「ビミョー」という表記もブログ・SNS上では比較的好まれている。

以上のようなことを語誌的に明らかにしている。

## 第7章 やばい

第7章では、「やばい」について、分析・考察している。

「やばい」は、「恐ろしく耐えがたい苦痛」を表すマイナス評価を示す隠語であったものが俗語化し、流行語となり、一般語として定着した。この語は、近世後期から「やば(な)」として現れ、明治期には、恐怖の対象として警察関係の人間を表す隠語として全国的に使われていた。プラス評価性の「やばい」の萌芽は1970年代に見られ、プラス評価の「やばい」は、1980年代（草創期）、2000年代前後（安定・発展期）、2010年代後半から現在にかけて（成熟期）の3期に渡り、流行語となっている。

以上のようなことを語誌的に明らかにしている。

## 第8章 結論と課題

第8章は、各論で取り上げた5つの語について、要点をまとめ、さらに、反義併用などの観点から全体をまとめ、結論としている。

最後に、今後の課題として、この研究成果の日本語教育への応用を考えることなどを挙げている。

以上が本論文の概要である。

## IV. 論文の総合評価

### 論文提出までの経緯

学位申請者は、2017年4月に本学言語教育研究科博士後期課程言語教育学専攻に入学し、修了に必要な10単位以上を取得、外国語（英語）検定試験にも合格している。

博士論文完成発表会は、2019年12月21日に実施され、論文は2021年4月1日に受理されている。論文提出時の業績は、学内外の研究会誌における学術論文6本、学会等における口頭発表（博士論文中間発表会を含む）8本、計14本である。

### 論文の審査結果

審査委員による論文審査会を2021年6月17日に行い、審議の結果、全員一致で「合格」とし、続いて、同日、最終試験（口述試験）を公開で実施し、審議の結果、全員一致で「合格」と判定した。

## V. 審査所見

本論文は、反義併存的な性格を持つ「結構」「大丈夫」「適当」「微妙」「やばい」の5つの語が、どのような意味・用法の変遷をたどり、反義併用的な性格をもつに至ったのかを、主に文献資料によって明らかにしようとした研究である。

本論文は、約700ページに及ぶ大作で、各語について、100～150ページが費やされている。研究方法としては、各語について、中国の古典籍から、日本の古典、近現代の辞書・新聞、現代の書き言葉・話し言葉、ブログまで、資料の博搜に努め、その膨大な資料に基づいて、意味・用法の分析を行い、合わせて、先行研究を丁寧に読んで、考察を行い、各語の語誌を明らかにしていく方法をとっている。

本研究は、大きな発見をめざすというより、非常に地道で丁寧な調査によって、各語の語誌（語史）を明らかにして、記述しようとするものであるが、その記述の中には、多くの重要な発見や指摘が見られる。それらをいくつか挙げておく。

「結構」については、現行の国語辞典では、名詞・形容動詞・副詞の順に意味記述が行われているが、現代語においては（明治期まではほとんどなかった）副詞としての用法が非常に多く、さらに、近年では、「語調調整的」な用法も現れてきているという指摘がされている。

「大丈夫」については、現行の国語辞典では、名詞・形容動詞・副詞の順に意味記述が行われているが、現代語においては副詞としては使われなくなってきていることを指摘し、また、近年における「勧誘・提案→断り」の「大丈夫」の用法を整理する試案を提示している。

「適当」については、現行の国語辞典では、「ぴったり」・「ほどよい」・「いいかげん」の3つの意味記述が行われているが、このほかに、現代語には、「任意に、随意に、ランダムに」といった意味で使われる用法も見られることを指摘している。

「微妙」については、近代に至るまで、非常に程度の高い称賛を表す語であったこと、「どちらともいえない」は現代的な意味であり、否定的な「ビミョー」が使われるようになったのは、2000年代初頭あたりであることを指摘している。

「やばい」については、明治～昭和初期の隠語集の調査によって、この語が西日本を中心に、全国各地で使われていたことを示し、また、流行語としての「やばい」には、流行の時期が3期あった（現在3期目）ことを指摘している。

この研究成果は、辞書などの記述に供するというもののほか、日本語教育においてこのような語をどう扱うべきかを考える際に役立つデータを提供するものと思われる。ここで

収集された膨大な資料は、さらなる研究に生かせるものと思われる。

最後に、審査委員会で指摘された問題点と課題を挙げておく。

1つは、論文の方向性や構成がわかりにくいという点である。本論文の標題は、「反義併存的な語に関する研究」であるが、内容は、各語の「反義併存的」な性質よりも、各語の意味・用法の変遷（語誌）が中心となっており、それも、意味・用法だけでなく、表記についても大きく取り扱われるなど、内容が盛りだくさんで、この研究が明らかにした重要な点が目立たなくなってしまう。たとえば、各語の意味変遷のまとめとなっていると思われる「語義関連表」などは、もっと目立つ形で示したほうが研究の成果がはっきり示せたように思われる。

ほかに、多くの資料・データがありながら、それが考察に生かし切れていないように思われるという点がある。たとえば、本論文では、各先行研究のあとに「考察」があり、各研究を丁寧に見ていくというやり方をとっているが、資料・データがそのあとで示されるため、この考察が規範を示すのか、現象を観察した結果なのか、わかりにくくなってしまっている。また、漢語出自の「結構」「大丈夫」「適当」「微妙」について、中国古典籍を対象とするコーパスからの用例も取り上げられているが、日本語の語彙として取り込まれる以前の用例と、日本語の語彙に取り込まれた後の用例とをどのように位置づけるかについては、今後の課題として検討してもらいたい、という審査委員からの指摘があった。ただし、これは、今後の研究に対する期待を込めての指摘であり、本論文の構成と評価に関してマイナス要素となるものではない。

本研究には、今後の研究に発展可能な多くの材料が含まれている。たとえば、日本語教育の観点から、「反義併存的」な語の意味確定のためのストラテジーを探るといった方向で研究を進めることも可能であろう。今後の期待される。

審査所見をまとめる。本論文は、「大学院学位論文審査基準」（「博士論文審査基準」）に照らして、①研究テーマ、②先行研究・文献資料・調査などの情報収集、③研究方法、のいずれにおいても、おおむね適切・妥当であり、④論旨もおおむね妥当であると認められる。⑤全体の構成、言語表現については、大きな問題はなく、「論文」としての体裁が整っているものと判断する。⑥論文の内容について、独創性を有すること、当該学問分野の研究に幾ばくかの貢献をなすものであることは、上に述べたとおりである。また、学位申請者は、これまでに積極的に国内外の学会・研究会で研究発表を行ってきており、2021年の秋からは、海外の高等教育機関で日本語教師として働く話が進んでいる。これらのことから、当委員会は、学位申請者には、高等教育機関で自立した教育者・研究者として活躍していく能力及び学識が備わっているものと認める。

## VI. 審査委員会結論

以上により、本審査委員会は、慎重・厳重な審査の結果、総合的に判断し、3 委員全員が一致して、学位申請者に対し、学位「博士（言語教育学）」を授与することに同意するものである。